# 決断

とりっぴー野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
決断

【Ｎコード】
Ｎ０２７７Ｑ

【作者名】
とりっぴー野郎

【あらすじ】
あなたなにとっての人生最大の決断とはなんですか？
昔好きだった、今は亡き人の命。
今存在する大切な人の命。
人生最大の決断の時、彼はどちらを選ぶ！？

「ブラボー！！」
会場がドット盛り上がる。
観客のほとんどが席をたち俺を讃える。
四方からの拍手の音がホールに反響して一段と大きくなる。
（1仕事終わりっと）
俺は心の中でそう呟きながら拍手に包まれながらステージを後にした。

？？今回も収穫はなしか……
いくら講演をしてもなかなか手がかりが掴めない。
でもこの国に何か手がかりがあるはずなんだよな。
楽屋で手品の時に着ていた服から私服に着替えてると
楽屋のドアがなった。
「どうぞ」
入ってきたのは背丈が俺の胸にも届かない女の子。
「ゆっきー、今回も素敵な手品だったね。最後の光の手品が綺麗だったよ」
「それはどうも」
俺が軽く流すと彼女が顔を膨らまして怒ってきた。
「ゆっきーのバカ、アホ、マヌケ！！」
怒り顔がだんだん泣き顔に変わっていく。
「うっ、ちょっやめろって。謝るから泣かないでくれよ」
「にゃはは、また騙された！　ゆっきーアホだねー」
「このやろ～、大人を怒らせるとどうなるか思い知らせてやる」
美香が急いで楽屋から逃げるので急いで俺が追いかける。

？？俺も歳をとったもんだ……

全く息切れしてしてない美香の若さが羨ましい。
「てかさ今日はここに止まろうよ、外見はきれいそうだし」
美香のキラッキラの目を裏切る事もできず、今日はここで一夜を過ごす事にした。

なぜ毎日寝るところが違うような生活をしているかというとちょっと長い話になる。

五年前、俺が二十四歳の時、俺は一人の大切な人をなくした……
人生でただの一度俺が愛していた女。
来月には婚約をする予定だった。
幸せな家庭を築くつもりだった。
しかし突然彼女は死んだ。いや、殺された。

俺は当時、ＯＩＢＭ（Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ　ｉｎ　ｂｌａｃｋ　ｍａｇｉｃ）対黒魔術組織の
中枢の位置にいた。
対黒魔術組織とは世界各国に広がる悪事をはたらく魔法集団『黒魔術同盟』の
抹殺及び、拘束のために作られた組織。
秘密組織だけに一般人にはこの組織の存在を知られていない。
ましてや魔術の存在も知られていない。
これは世界に混乱を起こさないようにと政府の出した配慮だ。

俺らＯＩＢＭが黒魔術同盟の解体を狙うように、あいつらも俺らの抹殺を狙っていた。
得に中枢にいる俺や俺の周りの人は命が狙われやすい。
俺は親戚に迷惑をかけないよう、死んだという偽りの事実を信じ込ませ
故郷から遠い国で活動をしていた。

そこで彼女と出会った。
始めは女なんか興味なかったし相手にしていなかった。
でも俺はだんだん彼女に引かれていった……
そして初めての恋をした。
俺と一緒にいると彼女を危険な目に合わせると分かっていたが
彼女を手放せなかった。
彼女が死んだ原因は俺だ……

俺が仕事を終えて、雲がかかり星一つ見えない空の下を歩き、
彼女と一緒に住んでいた家に戻ると
いつもの暖かい彼女の笑顔は待っていなかった……
冷たくなった身体。精気の感じられない顔。
そして明らかに黒魔術のせいで内側から焼かれたであろう腹。
俺にとっては地球から太陽をのぞく事に等しかった。
俺は彼女を守ると誓いながらも守れなかった。
全部自分の誤った判断と、無力のせい。
自分の無力を嘆き、強くなろう……彼女を必ずしも生き返らせよう
と誓った。

ここまでは俺の昔の話だが、これから話す事に
毎日違うところに寝泊まりしている理由が分かるだろう。

俺はＯＩＢＭを抜けた。
得に理由なんかなかった。
もう何も失いたくなかったからかもしれない。
そして彼女を生き返らせる旅に出た。
手がかりは１つあった。
「第七禁書『生命復活』」
俺がＯＩＢＭを抜けるときに禁書欄から持ち出した禁書だ。

そこに記された材料と膨大な魔力があれば人を生き返らせる事ができるというものだ。
人を生き返らせる事が禁止されているのは分かっていた。
でも彼女を生き返らせると誓ったから……

記されていた材料は
・魔方陣を書く為の深海の粉。
・賢者レベルの魔術師三人分の魔力
そして
・等価交換の原則に乗っ取り、今現在で自分が一番大切だと思っている人の命
・復讐心を生き返りたいという思いに変える為、他殺で死んだ場合のみ、殺した人の心臓
というものだっった。

深海の粉はＯＩＢＭにサンプルとしておいてあったものを盗んできた。
賢者三人分の魔力っていうのはちょいときついが
今の俺の全魔力を使ったらお釣りがくる程度だ。

そして今俺の頭を悩ませているのが残りの二つ。
得に三番目の問題が深刻だった。
このままいくと俺の一番大切な人は美香になってしまう。
美香は旅の途中で拾った捨て子。
大切な人を失って、一人の孤独を知っている俺には目を背けられなかった。
俺はかつての大切だった人のために今大切な人の命を奪う事なんてできるのだろうか……

そしてもう一つの理由のために俺は色々な国を旅している。

表向きはマジシャンとして手品（たまに本当に魔法をつかったり）を披露し金を集め、
裏では彼女を殺したやつを探し求めている。
手品をしているときも怪しいヤツがいないか探してはいる。

死んだ彼女の死体状況から見て、殺したのは焔の魔術師。
しかもかなりの高レベルの魔術師だ。
そんなやつなら戦争やテロの一つや二つにからんでいてもおかしくない。
出火原因の分からないテロ活動があったなどの手がかりがあるとすぐにその現場へ向かった。

そして今回来たのはフランスのパリ。
ここのところ火元の分からない教会全焼事件が後を絶たないらしい。
これは何かあるとイタリアから鉄道でここに来た訳だ。

「ゆっきー、もう遅い時間だよ！！　早く一緒に寝ようよ」
「美香の甘えん坊は治らないのか？」
そうは言いつつも俺をしたってくれる美香は可愛い。
それにあいつは親の愛情を知らずに生きてきたんだもんな……
「んじゃ寝るぞ、おやすみ」
一人分のベットを二人で使い窮屈に寝た。
すぐに深い眠りについた美香。
??こんな顔見てしまったら殺せないよ……
俺も深い眠りについた。

「！！」
勢い良く起きる俺。
シーツは汗でぐっしょりで手を見ると大量の汗がついている。
??またあの夢か。

毎日見るあの夢を恨む。
血でそまった服、焼けただれた腹、精気のない顔、冷たい肌……
そんな過去から逃げる為にも、心の支えである美香を起こした。
「おい美香、今日は五日前に全焼した聖ルーリア教会の焼け跡に行くぞ。早く着替えて飯食え」
「フニャ、ふぁ～い」
寝ぼけた美香の顔を正そうと俺が軽い呪文を唱える。
唱え終わると同時に美香の顔の肉があちこちから引っ張られているようになる。
あまりの面白さに俺は笑う事しかできなかった。
美香もどうやらちゃんと起きたらしく、またいつものように怒っている。
「ゆっきーの意地悪！　ご飯作ってあげないもん！！」
そう、恥ずかしい事に家事はこの小さな女の子に任せてある。
昔は魔法に頼り切った生活を送っていたせいで、自分では何一つできないのである。
今は決戦に向けあまり魔力を使わないようにしている。
「悪い、俺が悪かった！！　頼むからスーパおいしい美香様の料理を私にください」
「分かればよろしい」とご機嫌そうに美香は言い、
俺は何とか食にありつけた。

準備が整うと早速近くの鉄道の駅まで行った。
「確かここから乗って、ここで降りるんだっけな。」
聖ルーリア教会はそれほど離れてはいないものの歩きではちょっときつい。
鉄道ではトランプを美香に教えた。
？？さすが子供だけあって覚えが早い。
ルーリア教会につく頃にはコテンパンに負けていた。

ついた駅から少しあるくと教会についた。
??ここがそうか……
そこには広い敷地面積に、焼けた木材が散乱している殺風景があった。
「これはひどい……」
教会の焼け跡に近寄ると焼けた木辺の一本から興味深い模様を見つけた。
「これは……魔方陣！！」
「えぇぇぇ！！　まさかのビンゴ！？　やったじゃん、ゆっきー！！」
嬉しそうにこちらを見てくる美香。
「うん……」
??いつか美香を殺さなければならない時が来るのかも知れない。
決断の時に一歩近づいたのだ……

木片を近くの宿に持ち帰り本と知識を頼りに魔方陣を解明しようと試みた。
「くそっ！！　焼けててはっきり見えねぇ。」
せっかくつかんだ手がかりなのに半分以上が焼けてしまっている魔方陣にいらだちがつのる。
「えっと……我……燃……東の……全てが……一つの……」
やっとの事で、見えるところの意味を解明した。
??でもこれじゃ意味が分からない。
そのとき横で美香が何か呟いた……
「この東ってところ怪しくない！？　だってこの地図見てよ」

美香が机に広げた地図で聖ルーリア教会を探す。
美香は「ここだよ」と地図の右の辺りを小さな指で指す。
「これが何だよ？」

「だーかーらー、こうやって今まで全焼の被害が出た教会に印をるけるでしょ。
　それから、こうやって印どうしつなぐとっ、ほら！！　星形になってるでしょ」
本当だ、美香の言う通りだ……
？？なぜこんな難しいことに幼い美香が気付いたのだろう？
でも、そんな小さな疑問なんて正直今はどうだってよかった。
「すげぇよ美香！！　最高！！」
「へへーん」
美香が自慢気に鼻の下を人さし指でこする。
「ってことは『全てが1つの』って書いてあるから、これが巨大な魔方陣になっているんだな！！　次の被害は……たぶん中心部分に位置するこの教会か。ええっと……聖ルーマリエス教会？」
聖ルーマリエス教会といえばパリの中心に位置するここらで一番大きな教会だ。
？？この教会を破壊する為に、犯人はわざわざこんな巨大な魔方陣を作ったのだろう。
しかもちょうど壊された五つの教会は七日おきに壊されている。
となると明日……か。
美香にはこのことは黙っておこう。
？？明日は危険な戦いになるかもしれない……美香を巻き込む訳にはいかない！！
それから寝るまで明日への準備を整えた。

決戦当日……

「いってきま～す」
「いってらっしゃ～い」
俺は必要な道具をかばんに詰め、近くまで買い物にいってくると言って家を出た。

？？でもなんで美香は今日に限って、いつもは引っ掛からないような簡単な嘘に騙されたのだろう……
しかし今の俺にとっては取るに足らない事だった。
小さな疑問は忘れ、雲一つない空の下、俺は街の中心部へと急いだ。
聖ルーマリエス教会にはすでに祈りを捧げる信仰者達がぞろぞろと集まっている。
？？この中に混じっているのか……
怪しまれないよう周りを観察した。
人込みの中に、明らかに場違いな黒衣装の男がいた。
顔はフードでよく見えない……
フードの男は祈りを捧げる集団から少し遠ざかって、周りを気にしながら床にしゃがみ込み
何やら怪しい動きをしている。
？？捕まえるなら……今しかない！！
「氷神クレイセスよ、契約者ユキヤの名において我に力を授けよ。」
俺は小さく唱えると、右手を男に振りかざした。
男は俺の行動にとっさに反応し、俺の手から出た絶対零度のヤリをよけ、
フードをはずし指を動かした。
？？無詠唱だと！？
俺の上から炎の雨が降ってくる。
それを氷の壁で防いだ隙に
「みんな、逃げろ！！！」と叫んだ。
俺がそう叫ぶと祈りを捧げていた信仰者が一斉に教会から逃げ出した。
しかし氷は炎によわく、壁が溶けてしまった……
「仕方がないな……あれやるか！！」
俺は無詠唱で氷の粒を無数につくり黒衣装の男にめがけて放った。
男は炎を上手く操り自分と氷の粒の間に壁を作った。

「やっぱそうくると思ったよ」
俺は両手を掲げ意識を集中した……
両手を振り下げた瞬間、黒衣装の男は氷付けになっていた。
??あんだけお前の周りに水蒸気があれば、そこはもう俺の領域(テリトリー)だよ。
殺したら心臓は止まってしまうのでそのまま冷凍して圧縮の魔法をかけた。

後の材料は……美香の命……
いつかこうなることは分かっていた。
決断の時がやってくるのを……

何気ない顔をして俺は宿にもどった。
買い物からもどってきたことになっているので途中でカレーの具を買ってきていた。
「久々に俺が料理作ってやるよ」
「えぇぇぇぇ、まずくしないでよ」美香が顔を膨らませる。
「分かってるって」

??これも作戦のうちだ……

帰りにカレーの具ともう一つ買ったものがある。
美香に飲ませる為の睡眠薬だ。
??決断は美香を眠らしてからにしよう……

「たーんと召し上がれ!!」
久しぶりの俺の手料理に嬉しそうな顔をする美香。
「以外とおいしいね!!」
美香が笑顔でこっちを見ている……

俺は美香を見つめ返すこともできず、うつむくことしかできなかった。
??パタンッ！
どうやら美香が眠ってしまったようだ。
俺は美香を連れて、隣に借りていた部屋に行った。

もう一つの部屋には机がぽつんと一つある。
机には深海の粉で魔方陣が書かれてあり、その中心には切り取って氷付けにされた
黒衣装の男の心臓がある。
あとはここで呪文を唱え美香を殺すだけだ……
??そしたら彼女は……マリアは帰ってくる！！

今までに溜めてきた全ての魔力を魔方陣に注ぐ。
??俺は決断の時を迎えた……
今までの美香との思いで頭の中を巡る。
雪の降る日に裏道に捨てられていた少女……
俺が『美香』と名前を与えた時に見せた、表情のある美香……
俺の誕生日に夜中まで起きてくれていた、目の下にくまを作った顔の美香……
しかし美香との思いでは消え、マリアの顔が浮かぶ。
俺の助けを待っている……
??自然と涙が落ちた。

ためらいつつも、刃物を美香の心臓に向けた。
「美香！！　ごめん！！！」

??スッ
俺の手から刃物が滑り落ちる。
「やっぱり俺……できないよ……美香は殺せない！！」

「やはりその程度か」
「えっ……？」
床に転がっていたはずの刃物が俺の胸に刺さっている……
体中に激痛が走る。叫ばずにはいられない。
そして目の前には、気味悪く笑っている美香の姿……

「あーあ、あっけない最後だったな、期待して損しちゃった。」
意識が朦朧(もうろう)とする中、俺は美香に問いかけた。
「お前……本当に美香……か？」
「そうだけど何？　おっさんまだ死なないわけ？　まあ、そんなに簡単に死なれても面白くないけどね」

何が何だか分からない……
??あれは美香じゃない!!　違う!!

美香が満足そうに口を開く。
「おっさん、良い事教えてあげるね。私は正真正銘の美香だよ。雪の降る日に
あんたに拾ってもらった美香だよ。ついでに言っとくと、黒魔術同盟5聖人の中将だよ。」

俺は騙されていた……!?
いやそんなはずわない!!
あの俺をしたってくれていた美香な訳ない!!
しかし目の前の現実が、自分自身についた嘘を否定している。

「おかしいと思わなかったの？　私ぐらいの年子が地図の秘密なんて簡単に
分かる訳ないじゃん。しかも決戦の日に簡単な嘘に引っ掛かった時

も思わなかったの？
もしかして私の事を信じてくれてたから気付かなかったとか！？
今みたいに自分自身に嘘をついていたとか？　超うけるんですけど！！」
美香が甲高い声で笑っている。

だんだん話が掴めてきた。
それと同時にだんだん話を信じられなくなってきた。
俺はずっとあいつの手の上で踊っていただけなのか？
あいつの手の上でマリアのかたきを討っただけなのか！？

「今さ、かたきを討ったとか思ったでしょ？私読心術も使えるんだよね。
ついでにもう1つ良い事を教えてあげるよ。マリアちゃん殺しちゃったのわ・た・しだから♪
カレーの材料片手に満足気な顔で戻ってきた時は、まじ笑い堪えるのに必死だったわ！！」
そう言って美香がさらに甲高く笑っている。

えっ？……まさか……いや、そんなはずはない！！
こんな小さな女の子にできるはずが……
しかし現実が美香の強さを物語っていた。
絶望していく……俺の今までの旅は何だったのだろうか……
美香との日々は嘘だったのか……

「でも、っなんで……俺を殺さなかった？　いつでもその隙はあっただろう」
？？意識が遠のいていく。もうそろそろだろう。
せめて魔力が少しでも残っていたら。

「だってそんなんじゃ面白くないじゃん。あなたたちは私のお人形。大切な人に裏切られた人の顔を見るのが私の趣味ってわけ。今のあんたの絶望に満ちた表情を見てるとちょっとは楽しめたかも。でももう飽きちゃった。じゃあね、楽しかったよゆっきー♪」

美香の手が俺に近づいてくる……

??目の前が真っ暗になった。

??だんだんと視界が開けてくる。

「まだ……生きて……る？」

しかし開けた視界の中に見えたのは一面の花畑。虹の階段。

そしてあちこちに羽のはえた天使……

「そんなに都合よくねぇか」

でも天国に逝けただけでもいいほうか。

大切な人を守れなかった俺が。

??あっ！！

天使の中の１人がこちらに近づいてくる。

ずっと追い求めてきたマリアが！！

見間違えなどありえない。最初で最後の唯一愛した女。

「マリア……？　マリア！！」

かすれた声で必死に叫ぶ。

「会いたかった……」

無意識に涙が頬を伝う。

マリアが優しく微笑んでいる。

しかしそれは涙でぼやけた幻想だった。

「……てたのに……。」

?.?.えっ？

「信じてたのに！！！」

?.?.意味が分からなかった。
せっかく会えたのに。
ずっと待ち続けていた再会なのに。
なぜ彼女はあんなに怒りに満ちた顔を自分に向けているのだろう……

「ずっと私を生き返らせてくれると信じていた！！
何を犠牲にしてでも救ってくれると思っていた……
なのに……あなたは私を殺したあいつを選んだ！？　ふざけないでよ！！
あんたなんかいらない、居なくなればいい！！　地獄に落ちろ！！！」
彼女の翼が勢いよく開く。
強烈な光で目がくらむ。
そして光が消えていく……

Ｆｉｎ

## （後書き）

人生は決断の繰り返しだと思うんです。
自分の前にはたくさんの道がある。
どれを選ぶかによって大きく人生が変化する。
僕のような志望校に悩む受験生に読んでもらい
「決断は慎重に行わなければならないな」と思ってくれたら嬉しいです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0277q/

決断

2011年1月13日06時15分発行